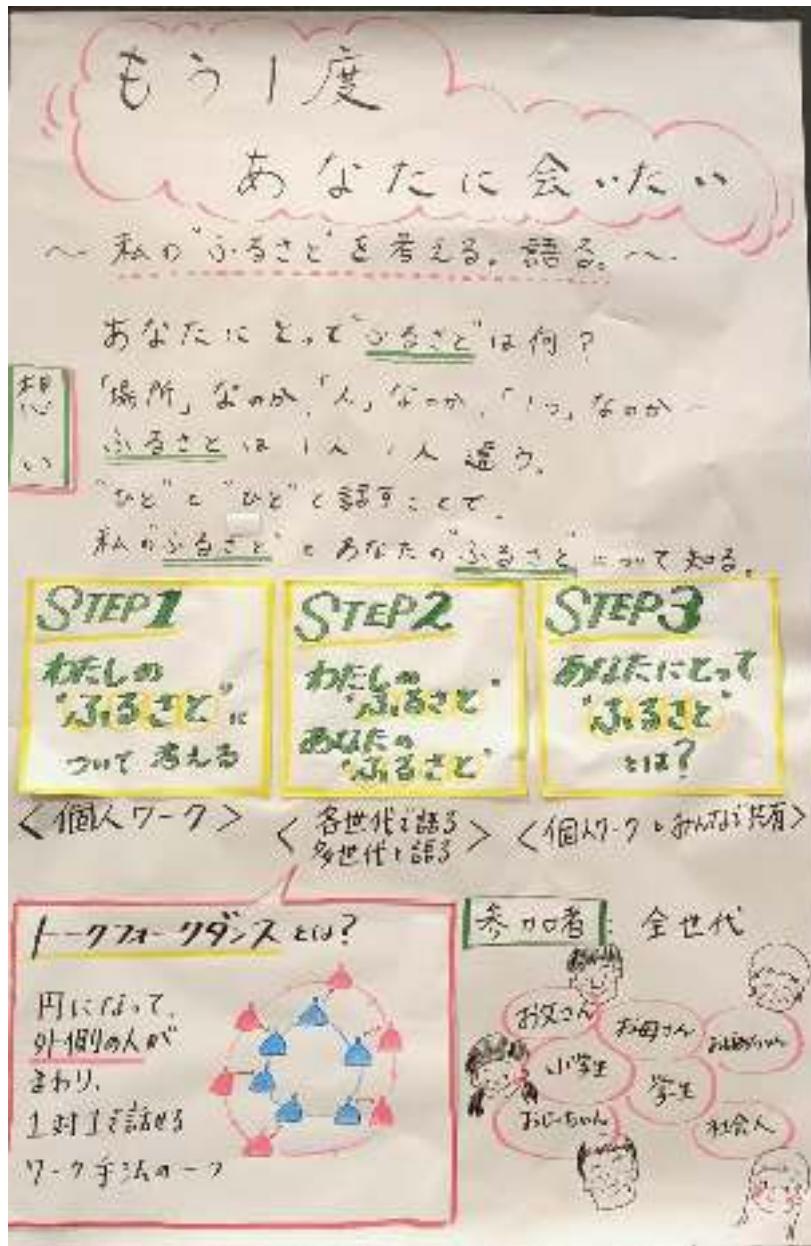


「The Next Generation Summit in J-VILLAGE」 参加者発表内容

「新しい東北」官民連携推進協議会事務局

● Aチーム発表内容



もう一度 あなたに会いたい ～私の“ふるさと”を考える。語る。～

私たちが考えたテーマは、「もう一度、あなたに会いたい～私のふるさとを考える、語る～」です。さて、ふるさと聞いて何を考え、思い浮かべますか。

登下校の帰り道でしょうか。親や友達の顔でしょうか。家の近所にある城や寺でしょうか。私は大阪・岸和田市の出身です。だんじり祭りが有名で、そのだんじりや友達を思い浮かべました。

ふるさとは「場所」なのでしょうか。それとも友人といった「人」なのでしょうか。それはひとつでしょうか。私は大学が東京にあり、授業で福島・飯館村を訪問しました。そこで訪れるにあたって、飯館村を福島のふるさとなんじゃないか、と少しずつ思うようになりました。ふるさとはひとつじゃないかもしれません。そして、ふるさとは一人一人違うんじゃないでしょうか。

対話する中で、自分の、また相手のふるさとを知ることでそこには愛着が湧き、眞に自分のふるさとのように感じるのではないかでしょうか。そして、自分は対話した相手のふるさとを訪ね、相手は私のふるさとを訪ねると、関係人口は増えていくのではないかでしょうか。そうした思いを叶えるために、私たちはこの事業を提案しました。

まずステップ①、私のふるさとについて考える。これは**自分のふるさとを考える**パートです。

ステップ②、「私のふるさと、あなたのふるさと」です。これは、**各世代と語る**というものです。そこで私たちは形式として「トークフォーカダンス」というものを採用したいと思います。これは、二重の円になって、外側の人が回り、1対1で話せるというものです。そして、じっくり話すのです。これをする前にアイスブレイクとして、同世代数人で集まって交流してもらいます。その後、多世代で語ってもらいます。例えば、青のグループは20代、赤のグループは60代、と語り合ってもらうことで、新たな示唆が得られると思っています。

そして、ステップ③、「あなたにとってふるさとは」です。これはステップ①と同じことを聞いていますが、ステップ②の多世代の交流で意見や考えが変わったりすると思うので、それを振り返り、共有をしたいと考えています。ステップ①とステップ③で参加者に記入してもらい、自分の**ふるさとについての意見、価値観の違いを記録**することでこの事業の成果をとらえています。

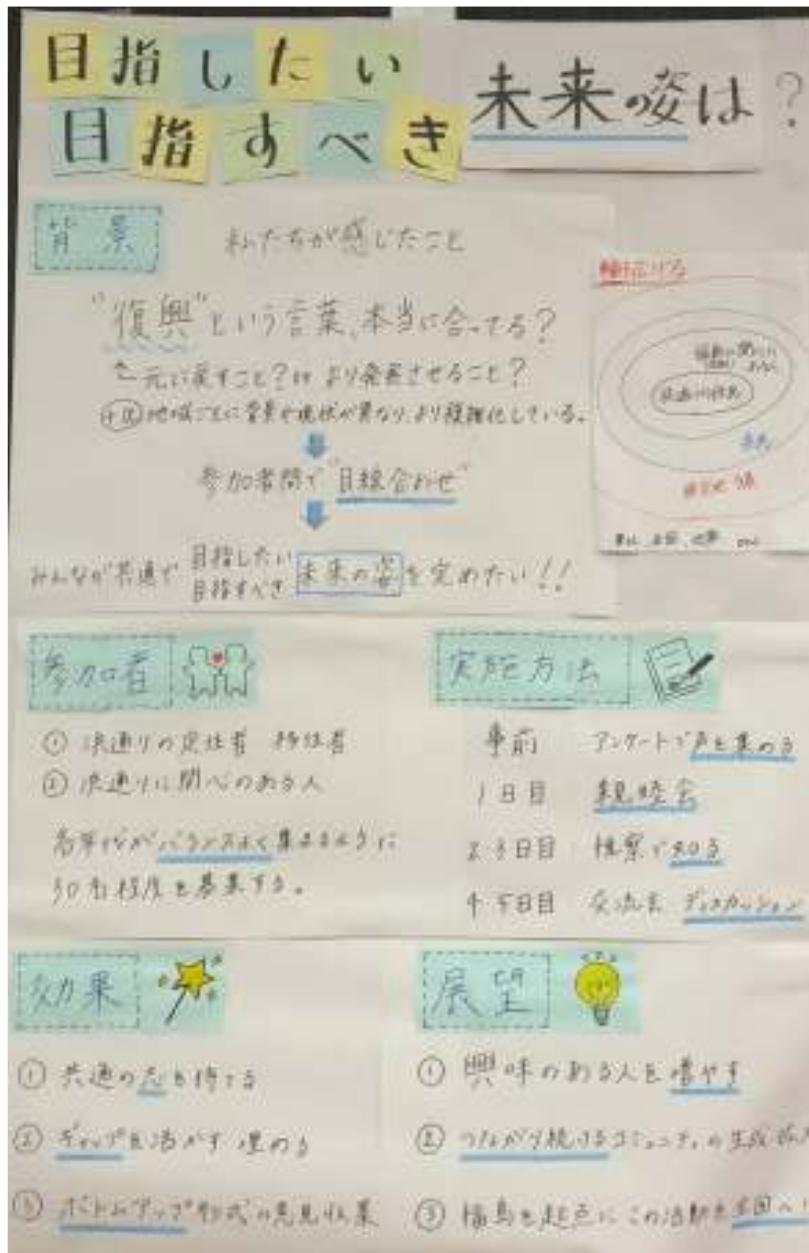
参加者は全世代を想定しています。お父さん、お母さん、子供世代、全てに参加してもらいたいと考えています。**県内だけでなく県外からも**来てもらいたいと考えています。グループは近しい年代で分けたいと考えています。企業に勤めている方は色々な肩書きがあると思いますが、それは度外視して自分個人の考え方でふるさとについて考えてほしいと思っています。

開催する**場所はJヴィレッジ**が相応しいと考えています。特にJヴィレッジは日本の復興の象徴です。その場所で自分のふるさとについて考えることは重要なと思います。Jヴィレッジの芝生の上で考え、語り合うことが素晴らしいと思います。語り合った後に、相手に対して「もう一度あなたに会いたい」と言えるようになれば、この企画は成功したと言えると思います。以上です。

＜質疑応答＞

Q.日本のふるさとについて語り合う、という取組だが、参加者は浜通りの人が中心となるのでしょうか。
A.浜通りの方々だけでなく、県内または県外から来て欲しいと考えています。

● Bチーム発表内容



目指したい、目指すべき未来の姿は？

私たちB班は、「目指したい、目指すべき未来の姿は？」というテーマのもと、話し合いの場を持ちたいと考えました。このテーマ設定のごだわりとして、敢えて主語を置いていないということがあります。一人一人、目指したい街の姿であったり、こんな風になつたらいいな、復興したな、と感じる点は様々です。また、行政や街としての目指すべき姿も街ごとに異なります。今後、福島へ興味を持ってもらうにあたって、コミュニティの場が広がっていくと考えられます。そう考えると、「私たち」という主語を置いたときに、この「私たち」の定義が変わってくるはずです。また、「私たち」という主語を置いた場合、コミュニティに入りづらかったり、置いてけぼりにされている、と感じる人も出てくると思います。このような背景から、私たちは主語を置かないテーマを考えました。

テーマ設定の背景です。私たちは視察を通して、復興という言葉の意味について疑問を持つようになりました。復興って震災前の状態に戻すことでしょうか。それより、震災前の街の状況よりも発展させることですか。そもそも震災後、新しい取組を始めている時点で元の街に戻そうとしていること自体、違うのではないか、と私たちは思うようになりました。また、福島では地域毎に背景や復興の状況が異なり、複雑化している現状があります。そのため、このような背景から復興に対するイメージや目指している復興がバラバラという現状があることに気付きました。参加者間、それよりももっと大きい範囲での目指すべき姿、復興という言葉を使わずに何かひとつものに向かっていく指標となるものを作りたかったら、とこのテーマを設定しました。

具体的な実施内容について説明させていただきます。2つおりのグループに参加していただきたいと考えています。**浜通りの定住者、移住者の方々と浜通りに関心のある方々**のグループです。各年代が偏りなく、参加していただけるよう考えています。人数は30人ほどを想定しています。

実施の行程ですが、長いですが**4泊5日**ほどを想定しています。まず0日目として、参加してくださる方々に**ありのままの福島のイメージや印象を事前にアンケート**を実施します。こちらとしてもそれを聞いて参考にしつつ、参加者としても「自分は福島をこういう風に考えていたんだ」と知ってもらおうと思っています。

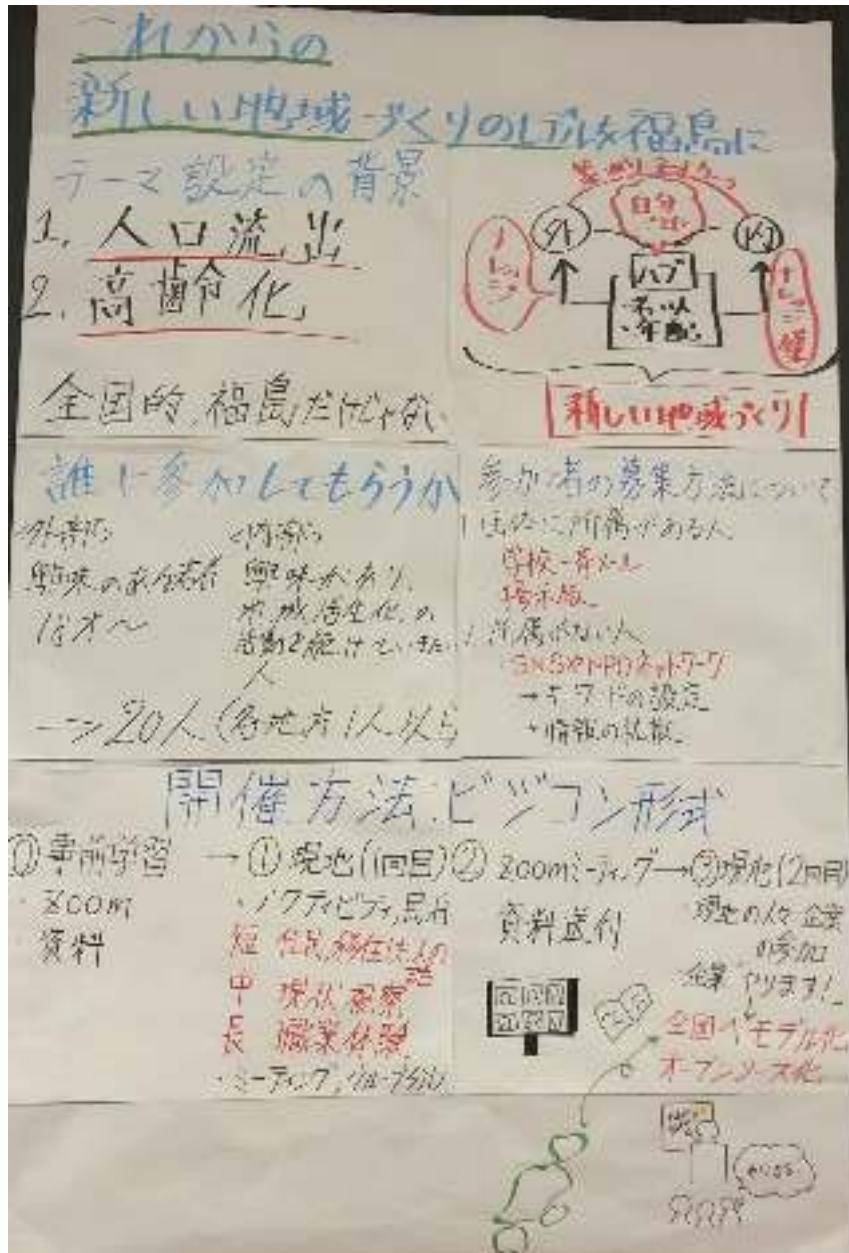
まず1日目は、それぞれのグループ、まとめて親睦会をしようと考えています。これは**鹿又のさつまいも掘りや乗馬を体験**したり、実際に福島にある体験をしてもらい、福島を知りたい、親睦を深めたいと考えています。2,3日目で視察という形で福島内を見てもいます。**伝承館や中間貯蔵施設を視察**してもらって、知ってもらいたいと思います。4,5目で実際に**交流会、ディスカッション**を通じて、「目指したい、目指すべき姿」はどういうものなのか、詰めていきたい。最後は、**宣言書**という形で出していきたいと考えています。

この活動の効果としまして、一番大きなものは共通の志を持つところと考えます。それぞれ活動していても目指すところが違うと、それそれが正反対に行ってしまうことも否めないと思います。具体的な活動をする前に、目標を定めて同じ目標に向けて進む、という絵が大事だと考えています。また、ギャップを埋めたり、活用するというところも大事と考えています。ギャップを活用するのは、ディスカッションにおいて福島内、外で考えていることをミックスして新しい知見を生み出したり、ギャップを埋めるためには親睦会や交流会で実際に声を聞くことで正しい情報や知識を得られると思っています。3つ目のボトムアップ形式の意見収集で、普段は聞くことの出来ない意見を聞くことができると思っています。

最後に今後の展望についてです。現在は福島に関心のある人に限定されていますが、これを講演会やフォーラムを通じて国内、ひいては世界に発信していけたら、興味のある人を増やせると思います。また、興味のある人を増やすだけではなく、その人たちを繋げる、または繋がり続けるコミュニティを生成し、継続して運営していくことが大事かと考えています。

この活動は福島だけでなく、国内、海外にも通用する考えたと思うので、福島を起点にこの活動を全国に広めていければと考えています。

● Cチーム発表内容



これからの新しい地域づくりのモデルを福島に

私たちのチームが考えたテーマは「これからの新しい地域づくりのモデルを福島に」です。福島と言えば、復興、復興と12年ほど言われ続けてきたのですけれども、ここで最先端として何か出来ないかということで、私たちが目指す最終的なゴールが「地域づくりのモデル化」というところです。ここに関わってくるのが、内部の人達と外部の人達です。それで、外部の人達というのは、イメージが付くと思いますが、福島を訪れる人達、内部の人達というのは、福島をふるさととする人達のことです。その人達が福島の「浜通り」をハブとして様々なプロジェクトを行っていきます。そこで得られたものを、外の人達にとってはナレッジ、内部の人達にとってはナレッジと共に地域づくり。その成果自体がギフトとして得られていく、そのようなwin-winの関係のもと、新しい地域づくりのモデル化を目指しています。

このテーマに至った背景ですが、昨日、視察を3か所行いました。伝承館から始まり、中間貯蔵施設としろはとファームで様々な資料を見て、地元の皆さんのお話を聞いて、その中で問題が幾つか見えてきたのです。若者が少ない、仕事がない、といった問題を出し合った時、最終的に2つの大きな問題にまとめられると思います。一つ目が人口流出です。これは県内の都市の方へ行ってしまう若者の流出も含まれるんですが、それと共に12年前に福島の外へ出ていったきり、戻って来ない人達も含んでいます。

二番目は「高齢化」です。これは福島だけではなく、全国的な課題かと思います。ですので、**福島・浜通りをハブとして**、全国、県内から多くの人達が集まって、一緒に色んなことをやって、そこで**得られた知識**というのを地域づくりに**固定化**していく**全国に普及**していけたら、私たちは考えました。

参加者については**全国から**募ります。現在は浜通りに住んでいないけれども、地域創生に興味のある18歳以上の若者、また現在浜通りに住んでいて、地域活性化に興味がある**若者**が対象です。全体で**20人**ほどを集めたいと考えています。

参加者の募集方法ですが、大学などの団体に所属している人に対しては、学校への一斉メールや掲示板を通じて募集します。団体に所属していない人については、NPOやNPOを通じたSNSを使って募集します。SNSでは「地域創生」や「移住」などのキーワードを使って拡散し、多くの方にこの活動を知ってもらいたいと考えています。

具体的な開催内容を説明します。まずは、**事前学習**として、zoomや資料を通じて福島の現状について知ってもらいます。その後、実際に**浜通りに来て、アクティビティや民泊**を行います。ここではアクティビティを短期、中期、長期の3つ設定していて、それぞれの参加者の希望に応じて選択できるようになっています。

具体的なアクティビティの内容としては、住民や移住した人の話を聞くことや、現状を視察したり、農業などの実際の職業を体験することを考えています。その後、アクティビティを通じて学んだことや考えたことをもとに、**ミーティングとグループ分け**を行います。その後、各グループごとにzoomなどで具体的なプランを考えています。最終的には、そこでまとまった地域創生のプランを企業の方々を含めた浜通りの人々に対して、**プレゼン**します。そこで賛同が得られたものについては、**企業と共同で実行**に移していく、ということを考えています。

ここまで、モデル化の話に戻るんですが、開催方法①について、現地の人とどういうやり取りをしたら、リアルなニーズを引き出せるか、また②、③で企業の方々へビジコンのように発表して企業の皆様に関心を持ってもらえるか、といったところをモデル化していくほしいと思っています。そして、最終的な報告書として発表するにどまらず、その過程をSNSで発信していくたり、固定したグループを作って、毎年継続して新たに募集をしていく、その過程をまた発信していく、また募集をして、とそういうサイクルを作りたいと思いますし、それをオープンソース化していく、全国的に広まることを期待しています。

＜質疑応答＞

- Q. 現地でアクティビティをされると発言があったのですが、どれくらいの期間、体験される予定なのでしょうか。
A. 短、中、長期とご紹介しましたが、長くても2週間を予定しています。また、期間を問わず、現地の方と民泊という形で一緒に生活をするという形が相応しいと考えています。その中で視察をしたり、現地の方を招いて一緒にワークショップをやる、若しくは1対1でお話を聞く、というのを参加者が選んだ期間の中で出来るだけやっていただけよいかと考えています。
- Q. その上で企業に提案をされいくと思います。その内容としては、どういったものになりますか？
A. 企業に対しては、一緒に商品開発をしたり、福島のPRしたいところを一緒にやっていきたいと思います。実際に参加すると案が出てくると思います。現地で体験したり、民泊で感じたことを持ち帰って、その後zoomでミーティングをしたり、プレゼンをしたりしながら、最終的にはビジコンのような形で提案する、という流れを考えています。